



1月11日（木）の5附属連絡会議は情報交換会のテーマを「各校の交流および共同学習」とし、豊島区教育委員会教育部指導課指導主事の関根憲一先生を助言者にお迎えして開催しました。その概要をお届けします。

各校の交流および共同学習

【附属特別支援学校の交流の概要】

- 居住地交流（小学部の児童が多い。中学部以上はごくわずか）・・・通常の授業や部活など
- 近隣の学校との交流（小学部が多い）・・・給食や文化祭など
- 附属学校間の交流・・・行事や活動（ゲームやスポーツなど）を通して
 - ・幼稚部同士（視覚・久里浜）
 - ・中学生同士（視覚・桐が丘、視覚・附属中）
 - ・高校生同士（視覚・附属高、聴覚および大塚・駒場高、坂戸高）



【関根先生からのコメント】

○多くの学校で交流をもっていて非常にありがたい。指導主事として感じている課題は、交流及び共同学習をやっているという事実だけが先行しがちではないかということ。

副籍交流などの報告会でも、やっていることの報告が主。

大切なことはやったことで子どもたちがどう変わったかということ。

「良かった」という感想が多いが、それだけでは見取りが不十分だったのではないかな。

→評価をどうするかが課題

○都立の特別支援学校と小学校の事例

特別支援学校の指導案と小学校の担任の指導案の二つの立場で指導案が書かれた。

→小学校の指導案は、ユニバーサルデザインを意識した指導案に変わった。

どうやったら子どもたち全員が分かるかという視点で授業が考えられるようになった。

○特別支援学校と小学校の先生が、交流を行うにあたり打ち合わせをして双方摺合せをしていくことが必要である。そういったところでの教員同士の交流がまずは大事。回数が増えると準備の負担感が大きいという校長からの声はある。打ち合わせの負担を軽減するための方法なども聞きたい。

○保護者、地域の方からの問い合わせはインクルーシブ教育を意識したものが多い。

特別支援学校に通うが、地域の学校で勉強させたい。

→交流及び共同学習が活用できていると思っている。

○小学校の子どもには、受け入れる力がある。聾学校の子どもを小学校で受け入れるにあたって心配したが、子どもたちは何の問題もなく受け入れた。中学校になると直接交流の場は極端に減る。小学校では受け入れる土壌があるのに、中学校では交流の場が減るというのは残念だ。間接交流だけではなく直接交流の場を増やすことが必要だと思う。

○交流時に特別支援学校の子どもといい関わりをしてくれる児童が必ずいる。だから、交流・共同学習を行う意義がある。



盛んに行われている交流・共同学習のあり方を振り返る貴重なお話を聞くことができました。